

「えみし」社会の成立とアイヌ民族へと連なる

エトノスとの関連についての予察

女 鹿 潤 哉

一 「えみし」社会成立の背景（はじめに）

東北北半域^①から道南西部^②、就中東北北半域から道南にわたる津軽海峡をはさむ南北地域は、縄文時代早期〜弥生時代中期、土器様式の共有を始めとする共通性の強い文化圏（以下、「共通文化圏」に表記する）を形成してきたと考えられる。しかも、これら文化要素の共有は、「第

二の道具」と称される信仰などの精神文化に伴うものも含まれている。世界の民族事例を見ると、轆轤成形以前の土器製作は、おしなべて女性

の手になるものとされ、土器様式の共有には一連の通婚・交易圏、並びに相通じる言語が関与しているともされる。

「共通文化圏」が一連の交易圏を構成することについては、主として縄文時代において、秋田県から新潟県域に至る日本海側で産出するアスファルト、並びに石器の素材となった北海道産の原石を用いた黒曜石製石器、新潟県姫川産の翡翠を用いた装身具類の「共通文化圏」域における展開状況などからも明らかである。また、通婚圏についても、縄文社会の婚姻形態は、既述した土器様式を始めとする文化要素の共有のあり方などからも首肯すべきものと考ええる。さらに、一連の通婚・交易圏に

は、自ずから相通じる言語を始めとする文化の共有が伴うものとも理解され、東北北半域を中心とする地域においても、北海道側と同様、アイヌ語による解釈が妥当と考えられる地名（以下、「アイヌ語地名」に表記する）がまとまりをなしてみとめられることから、「アイヌ語系言語」の共有があつたと考える。

以上をふまえると、「共通文化圏」は、一連の通婚・交易・言語圏を背景として成立した相通じる文化、価値観を基礎とするアイデンティティ^⑩によって密接に結びついていたと理解される。

しかし、弥生時代後期には、同中期まで東北地方各地にみとめられた地域性は、該期の指標とされる天王山式土器群のもとに齊一化され、東北北半域における地域性もまた消滅したと考えられる。やや遅れて、北海道側においても、道央を中心とする地域に展開していた後北式土器群の半ば過ぎに位置付けられる後北C₁式土器が、東北地方の齊一化以前、東北北半域とともに「共通文化圏」を構成してきた道南を中心として道南西部にまで展開した恵山文化を始め、道内各地にみとめられた地域性を同化したつつ、劇的に全道に拡張していった。

そして、後統する後北C₂・D式土器は、全道を齊一化するとともに、

あまつさえ、千島列島南域や樺太南部、新潟県域を含む東北七県にまで広域的に拡散し、就中東北北半域にはとりわけ広範な展開を示すばかりか、該期の後北文化を構成する文化複合もまた、重層的に展開する傾向がみてとれる。¹³⁾ 一方、後北C₂・D式に先行する後北C₁式土器の本州側への展開は、青森県北部、並びに新潟県域の数遺跡に限定され、それに先行する後北A、B式土器の展開もまた、青森・秋田両県北部などでわずかに指摘されるに過ぎないのに対して、後北C₂・D式の東北地方への展開は実に顕著なものがある。こうした後北C₂・D式土器による全道の斉一化は、後北文化が、従来、石狩・苫小牧低地帯などを境として南西部と北東部とに大きく二分されてきた北海道の文化圏を一つに収斂し、より広域の文化圏（以下、「拡大文化圏」に表記する）の形成を指し示す動きとして理解される。¹⁴⁾

後北C₂・D式土器は全道、並びに東北北半域、千島列島南域、樺太南部に展開しているが、こうした広域的展開は、該地域をも「拡大文化圏」に組み込もうとする性格が内在していたことを示していると考えられる。また、その展開範囲は、千島列島で北側に拡大し、東北北半側で北に縮小する形で、近世のアイヌ文化圏と重なるものとなる。しかも、後北文化は、後続する北大・擦文期を経て歴史的にアイヌ文化へと連なっていることをふまえると、後北C₁式、C₂・D式期こそは、アイヌ文化誕生に向けての胎動期として位置付け得ることになる。¹⁵⁾

また、筆者は、本誌第一一三号を始めとする旧稿において、東北北半から道南西部にわたる地域が後北C₂・D式期以降、ほぼ古代を通じて一連の「紐帯」で結ばれてきたことを積極的に評価し、「拡大文化圏」

は、弥生時代後期に解体した「共通文化圏」の伝統を継承する性格を有するものであった可能性について指摘した。¹⁶⁾ また、古代の東北北半から道南西部にわたる地域には、国史上に「蝦夷」などの用字によって表記され、古代の倭国からエミシ、日本からエビスなどに呼称・認識された集団（以下、「えみし」に表記する）が居住していたとされる。すると、古代の「拡大文化圏」内の該地域（即ち、概ね「拡大文化圏」南半）における在地集団の主体は、「えみし」だったことになるから、該地域が古代を通じて一連の紐帯で結びつく濫觴となった後北C₂・D式期こそは、「えみし」社会の成立期として理解される。

以上をもふまえ、筆者は、後北C₂・D式土器が東北北半広範に展開する（即ち、東北北半域が「拡大文化圏」南半に参入・再編される）四世紀前半を中心とする時期を「えみし」社会の成立期に位置付けた。¹⁷⁾ さらに、その後の検討によって、「拡大文化圏」形成の背後には、後世のアイヌ民族へと連なるエトノスの初源の萌芽があった可能性も浮上している。¹⁸⁾ 小論は、こうした視点に立ち、「えみし」社会を成立へと導いた「拡大文化圏」形成の意味について愚考するものである。

二 「拡大文化圏」の性格

後北C₂・D式土器が北海道にとどまらず、海を越えた南北の広域に展開する要因については、既にオホーツク文化の先駆ともみなし得る鈴谷式土器群に伴う樺太を拠点とする文化が道北沿岸部などへ南下し、石狩・苫小牧低地帯などへも拡散する動きに関連するという見解が提起さ

れている²¹⁾。また、それが該期の北半球における気候の寒冷化によって惹起されたとする見解も示されている²²⁾。さらに、三世前半は八世紀前半とされる「古墳寒冷期」に伴う生活環境の悪化とともに、天王山式期の東北地方農耕社会との交流を背景として、北海道縄文後期社会における生業の変化に要因を求める指摘もみられる²³⁾。

確かに、鈴谷式土器群の道北沿岸部などへの展開は、概ね二世紀初頭～四世紀末に位置付けられ、後北C₁式～C₂・D式期に並行する時期があったことは明らかである。しかし、鈴谷式に後続する十和田式土器群を嚆矢とするオホーツク文化の北海道への本格的な展開は、概ね五世紀以降とされ、オホーツク海沿岸部や道北沿岸部などにほぼ限定される。

しかも、オホーツク文化は、擦文期半ばの九世紀代には、既に崩壊が始まり、擦文文化への同化が進む過程で、トビニタイ式土器を指標とする文化へと変質する。また、オホーツク文化とそれに並行する北海道在地の後北C₂・D式～擦文期の文化とは、生業面などにおいても、深刻な利害関係を生じさせるものではなかったと考えられる²⁴⁾。すると、鈴谷文化や後続のオホーツク文化の進出は、小規模である上に、生業面からみても、北海道側との間に重大な緊張関係を生じさせたとは考え難く、後北文化拡大の主因は、北からの鈴谷・オホーツク文化の進出ではなかったと理解される。

また、気候の寒冷化についても、後北C₂・D式土器が北海道よりも北の樺太南部や千島列島南域にまで展開していることをふまえると、それを「拡大文化圏」形成の主因とみなすことはできない。

こうしたことをふまえ、筆者は、「拡大文化圏」形成の主因が西日本

を中心とする弥生後期倭人社会の政治的統合に伴う激動にあると考えた。即ち、既述した東北地方弥生時代後期の指標である天王山式土器群は、一世紀後半には成立していたと想定され、二世紀中葉には、全道斉一化の契機となった後北C₁式土器が成立するとみられる²⁵⁾。一方、一～二世紀代の西日本弥生後期社会は、既に中期に出現していた青銅製祭祀具等の展開状況が示すように、祭祀を同じくする地域性が一層顕在化しており、それは、倭人社会の政治的統合の結果、より広域的な諸勢力が形成されたことを物語っている。

そして、該期の防衛的な機能を有する環濠集落や高地性集落などの展開から、西日本のみならず、北陸・関東・甲信地方以南の東日本にあっても、戦闘を背景とする緊張状況下にあつたと推察される²⁶⁾。また、中国史書『漢書』に見る多数のクニの分立「地理志燕地」、並びに『後漢書』『東夷伝倭』や『三国志』『魏書』『東夷伝倭人』（以下、『魏志』に表記する）などに見える中国王朝への朝貢、争乱の記録などからも、一～二世紀の倭人社会が抗争と政治的統合の帰結として成立した広域的諸勢力間の緊張状況下にあつたことを読みとることができる。

以上をふまえると、東北地方や北海道においては、実際に防衛的な集落や恒常的な戦闘状況が出現していないにしても、既述した倭人社会の緊張が少なからぬ影響を及ぼしたことは想像に難くない。

また、「拡大文化圏」形成の契機となった後北C₁式期には、西日本を中心とする倭人社会において、二世紀後半とされる大規模な抗争があつたとされる。即ち、『魏志』に「倭国乱」、遅れてなつた『後漢書』にも「倭国大乱」と見える抗争がそれであり、『後漢書』は、「桓靈の間」、

即ち桓帝（一四七〜一六七）と靈帝（一六八〜一八八）の治世の間のこととし、『梁書』は「倭国乱」を「漢靈帝光和中」に作り「諸夷伝倭」、一七八〜一八三年の間としている（『北史』も「靈帝光和中、其国乱」「列伝第八倭国」に作る）。その結果、倭人社会は、大和を拠点とした邪馬台国を盟主とする三〇ほどのクニグニの連合体（以下、邪馬台国連合に表記する）のもとに政治的統合が進んだとみられる。³⁰

一方、南西部を中心とする北海道においては、在地の後北C₁式土器と東北北半起源の後半期の天王山式土器群とが相伴する事例がみとめられ、後半期の天王山式土器群が道南西部を中心とする地域に出現する要因にも、こうした倭人社会の政治統合に伴う激動があったと考える。即ち、二世紀後半における倭人社会の激動は、東日本、さらに東北北半域を介して全道にも緊張をもたらし、当時、最も活力をもつて道央を中心に展開していた後北C₁式文化を中核として全道の収斂を促したと理解される。後北C₁式期は、概ね二世紀中葉〜三世紀前葉に位置付け得るものの、後北C₁式土器による全道斉一化の始まりは、「倭国（大）乱」に連動するものとみられ、実は概ね後北C₁式期後半の二世紀後半に生じたと考える。³¹

そして、その後、邪馬台国連合は、三世紀半ば過ぎまでには、東海地方西部を拠点とした狗奴国を中心とする東日本のクニグニをも傘下に取り込むなどして、前方後円墳を頂点とする政治秩序に基づく前半期古代国家たる倭国へと変貌を遂げた³²と理解される。詳細は別稿によっても述べたので繰り返さないが、倭国勢力は、三世紀後葉を通じて東北南半域へと進出し、該地域はほぼ倭国に編入された³³と理解される。

また、東北北半域広範に後北C₂・D式土器が出現するのは、概ね三世紀末〜四世紀前半以降であり、在地の終末期弥生土器「赤穴式」後半の特殊捺糸文段階、並びに古墳時代前期の土師器「塩釜式」に伴い・並行するとみられる。³⁴こうしたことから、東北北半域は、四世紀前半を中心とする時期以降に北海道後北文化圏との関係を深め、「えみし」社会が成立すると理解される。³⁵さらに、該期には、東北南半域、並びに同北半南辺に古墳が展開するなど、社会は一大変革期を迎え、その嚆矢をなす会津盆地における杵ヶ森古墳は定形化以前の前方後円墳で、布留0式期（三世紀後葉〜四世紀初頭）にまでさかのぼるとされる。³⁷

そして、後北C₁式土器の全道への展開が二世紀後半の「倭国（大）乱」と密接に関わっていた可能性をふまえると、その後の倭国の動きと後北C₂・D式土器の東北北半域への広範な出現とが無関係であったとは考え難い。従って、後北C₂・D式土器が東北北半域へ広範に展開し始める主たる誘因は、東北南半域、並びに同北半南辺への古墳出現が物語るように、三世紀後葉〜四世紀初頭の該地域における倭国勢力形成に伴う緊張にあった可能性が高いと考える。

こうした一連の激動が、四世紀前半を中心とする時期に「えみし」社会を成立させた³⁶と考えられ、既述したように、「拡大文化圏」南半域は古代「えみし」社会を構成するもので、旧「共通文化圏」域にも重なるものである。やはり、東北北半域の「拡大文化圏」参入は、倭国勢力の北進によって惹起された緊張を誘因として、かつて道南西部とともにあった「共通文化圏」の伝統を復活する性格を帯びた動きとして理解されるのである。そこにはまた、後述するように、後世のアイヌへと連なる

エトノスの萌芽があったと考えるものである。

三 「蝦蟇」「蝦夷」表記が意味するもの

『日本書紀』においては、「えみし」を表記する用字として「蝦夷」の他にも、「蝦蟇」が知られている。「蝦蟇」表記については、皇極天皇元年（六四一）九月二日記から持統三年（六八九）正月九日記にわたって「蝦夷」と併用されており、持統紀四年頃以降は、「蝦夷」と記すようになったとされる³⁸。このことについては、本誌第一〇四号掲載の拙稿において、持統三年六月二十九日の飛鳥浄御原令施行を契機として、「えみし」を表記する用字は、それ以前のエミシ認識に基づく「蝦蟇」から、律令国家日本側の異類に対する侮蔑意識を含むエビス認識に基づく「蝦夷」へと転換されたとする仮説を提起した³⁹。このことについては、ここでは繰り返さないが、「蝦夷」表記への統一時期に関しては、やはり、持統三年のうちになされていた可能性が高いことに関して、新たに確認できた点を指摘しておく。

即ち、持統三年六月二十九日記の飛鳥浄御原令施行を伝える記録の直後、同七月一日紀には、「陸奥蝦夷沙門自得」に仏像・仏具を賜ったことが見え、同七月二三日紀にも、「越蝦夷八釣魚等」への下賜のことが見え、ともに「蝦夷」に作っている。そして、『日本書紀』には、飛鳥浄御原令施行以降、「えみし」を表記する用字として「蝦蟇」が用いられることはなくなり、専ら「蝦夷」などが用いられるようになる⁴⁰。すると、「えみし」を表記する用字が「蝦蟇」から「蝦夷」へと転換するのは、

実は持統三年七月一日以前にあった可能性が強く示唆されるのである。

確かに、飛鳥浄御原諸令の中の本文として、直接に「えみし」を「蝦夷」に表記すべき旨の規定があったとは考えないが、既述した旧稿で述べたように、国史編纂は律令国家日本の成立とわかち難く結びついており、「えみし」に対するエビス認識の成立は、日本側の中華意識に基づくものであった。こうしたことを考え併せると、飛鳥浄御原令の施行に連動して、律令国家日本の公文書上の「えみし」を表記する用字が、「蝦夷」に統一された状況がみてとれるのである。

以上をふまえて旧稿を見直し、持統三年六月二十九日の飛鳥浄御原令施行に連動して、「えみし」を表記する用字は公式にエビス認識に基づく「蝦夷」に統一され、実際に同年七月一日紀以降、「蝦夷」表記が用いられたとする仮説を新たに提起するものである。

さて、次に「蝦蟇」「蝦夷」について述べる。唐代のことを記す中国古典『唐書』に「蝦蟇」「東夷伝日本」、『通典』に「蝦夷国」「边防一蝦夷」、『唐會要』には「蝦夷」「蝦夷国」が見えている。ここでは、国史上の「えみし」を表記する「蝦蟇」「蝦夷」の由来、その意味するところについて再検討する。これらの音は、ともに現代国語でカイとなり、現代国語漢字の音が中国語の古音をよく伝えていることをふまえると、それはほぼ古代の音を写している可能性が高いと考えられる。

また、史書を始めた中国文献は、樺太などのアイヌについて、元代には「骨嵬」、明代には「苦兀」「苦夷」、清代には「庫野」「庫頁」「庫葉」などに作り、これらの用字は、ギリヤーク（自称名は黒龍江下流域でニヴフ、樺太でニクヴン）やゴルド（ナナイ）などが樺太のアイ

ヌを *Ku-yeh* と呼んだことに由来するとされる。^① 民族誌によると、黒龍江流域や樺太における住民のアイヌに対する呼称は、トゥングース・満州系が *me*、ギリヤークが *me* である。^② すると、樺太などのアイヌは、歴史的に周辺諸集団からクイなどに呼称され、元・明・清代の中国文献がアイヌを表記してきた一連の用字も、これらクイなどの音を漢字で写したものであった可能性が高いことになる。また、国史上の「えみし」を表記する「蝦蟇」「蝦夷」の現代音であるカイも、中国元・明・清代のアイヌを表記する用字の音クイなどに近いものとなる。元代から今日までのアイヌに対する呼称がほぼ同じであれば、唐代以前にもそう呼ばれていた可能性があり、中国人がアイヌの祖先を音で表記したのが「蝦蟇」「蝦夷」であったとする理解は妥当なものと考ええる。

「蝦蟇」「蝦夷」の用字については、既述したように、皇極元年紀から持統三年正月紀まで両者が併用され、なおかつ、同じ記録の中での併用もみられるなど、『日本書紀』編纂に用いられた原資料に二つの用字が並行して用いられていたことは明らかである。^③ しかし、国史上の「毛人」や「肅慎」などの用字が中国のものをそのまま用いていることをふまえると、「蝦蟇」「蝦夷」についても中国の用字を輸入したと理解するのが自然である。^④ しかも、中国古典上の「蝦蟇」「蝦夷」の用字は唐代に初見し、それ以前の中国文献には見えていないことから、唐代の中国において成立したと理解すべきである。

旧稿で指摘したように、「蝦蟇」は、斉明五年（六五九）における唐への遣使を契機として斉明朝に採用され、従来の「毛人」にかわり、倭国公記録における「えみし」を表記する用字となり、斉明天皇が皇極天

皇の重祚であったことから、皇極元年紀にさかのぼって、記録の改変がなされたと理解される。^⑤ 即ち、斉明五年以前の倭国では、「えみし」を表記する用字として「毛人」を用いていたが、同年の唐への遣使以降、元来、倭人系エミシや倭人の名にも用いられた「毛人」にかえて、「えみし」を限定的に表記する用字として「蝦蟇」を用いるようになったと考える。^⑥ その後、律令国家日本は、飛鳥浄御原令施行を契機として、公的に東のエビス認識「夷」と結びついた「蝦夷」表記に統一し、記紀編纂過程で「蝦蟇」表記に拠らないエミシを表記する用字、即ち「毛人」表記をも「蝦夷」に改変したと理解するものである。^⑦

以上をふまえ、「蝦蟇」「蝦夷」の用字は、元来、中国唐代において用いられたもので、斉明五年頃の倭国においては「蝦蟇」が採用され、皇極元年紀にさかのぼって公記録上のエミシを表記する用字となり、持統三年六月二九日の飛鳥浄御原令施行以降は、「蝦夷」表記に統一するところが原則とされたとする仮説について再提起するものである。

また、同じく唐代のことを記す『唐書』には、靺鞨諸部について、「黒水の西北に又思慕部有り。益きに北行十日にして郡利部を得。東北行十日にして窟説部を得。亦窟説と號す。稍東南行十日にして莫曳皆部を得」「北狄伝黒水靺鞨」と見え、『唐會要』にも、「窟説靺鞨（屈説）」「卷九六靺鞨」について、ほぼ同じ内容の記録が見えている。この「窟説（屈説）」は、靺鞨の一部族とすれば、黒龍江流域から沿海州方面に比定し得るようにも思えるが、「窟説（屈説）」の音は *Kut-yet*、*Ku-yüeh* などクイに近いことから、樺太アイヌにあてる理解もみられる。^⑧

しかし、唐代の樺太には、アイヌ文化の母胎となつた擦文文化の遺跡、

並びに擦文土器すら存在しないことが判明している。⁽⁵²⁾ こうしたことから、近年、『広韻』等による推定古音では、「窟説」*kut-sei*、*kut-yet* は、「蝦夷」*ka-yi*、「骨鬼」*kut-gai*、「苦兀」*ku-gu*に近く、今日の北京音の「庫葉」*ku-ye*にも近いとして、北海道や本州北部のアイヌの祖先集団を指すとする理解が提起された。⁽⁵³⁾ 確かに、既述した「窟説靺鞨（屈説）」について、その地理上の位地を北海道に比定することに大きな矛盾はないと考える。また、唐代中国文献においては、「蝦蟇」「蝦夷」は倭国・日本との関連で記されるのに対して、「窟説（屈説）」は、「黒水」靺鞨との関わりで登場することをふまえると、中国に北方經由で知られたのが「窟説（屈説）」であり、日本經由で知られたのが「蝦蟇」「蝦夷」であったとする見解は妥当なものと考える。やはり、唐代の北海道におけるアイヌの祖先集団もまた、周辺の諸集団からカイ・クイなどに呼称された可能性が高いと考える。

四 カイ・クイの由来

唐代の樺太においては、アイヌの祖先集団が居住していなかったことは既に述べた。また、樺太などのアイヌが歴史的に近隣の諸集団によってクイなどと呼ばれ、元代以降の中国文献も、樺太などのアイヌをそれに近い音を以て表記してきたことをも考え併せると、唐代の中国においても、北海道などにあつたアイヌの祖先集団を「蝦蟇」「蝦夷」に音写したと解するのが自然である。それでは、アイヌやその祖先集団は、何故カイ・クイなどと呼ばれたのだろうか。

『積日本紀』巻第一解題が引く「弘仁私記序」には、「蝦夷」にカイの傍訓がなされたものがあり、『伊呂波字類抄』巻第三「蝦夷」の項が「カイ、東エビス」とするなど、古代の日本においても、「蝦夷」がカイによまれることがあつたことは明らかである。また、時代は近世に降るが、天明六年の佐渡信行著『蝦夷拾遺』序には、カイがアイヌの自称で、「蝦夷」はその音を表記するための用字であるとしており、文化年間の秦鼎の手になる『参考熱田大神縁起』頭書、並びに幕末期の松浦武四郎著『天塩日誌』などにも同様の説がみられる。⁽⁵⁴⁾

カイの音については、かつて、アイヌ語の *ka-ainu* 「我が同胞」がまつたもの、⁽⁵⁵⁾ 或いはアイヌ男子の自称で、唐人が中華意識に基づいて「蝦蟇」「蝦夷」に音写したもの⁽⁵⁶⁾ などのとする見解が示された。近年では、アイヌ語 *kaynu*（息子・甥など）との関連、⁽⁵⁷⁾ 或いは自称 *aynu* がアイヌ語のもつ声門閉鎖により、声門閉鎖をもたない言語を有する人々にはカイなどに聞き取られた可能性が指摘されている。⁽⁵⁸⁾ また、「蝦夷」が我が国においてもカイに訓まれ、樺太では自分の息子や男の孫を *kaynuca* と呼んだとして、アイヌの呼称中に *kay* 音が特徴として現れる可能性が、少なくとも現代アイヌ語の中にあるともされる。⁽⁵⁹⁾ こうした理解を重ね併せると、雑駁な考察ではあるが、*kaynu* の語頭 *k* 音が落ちた形が *aynu* であるから、*aynu* と *kaynu* とは、わかち難く結び付く語彙で、カイ・クイの由来となつた可能性が指摘し得る。⁽⁶⁰⁾ やはり、カイ・クイがアイヌの民族的自称に基づくものとする理解は妥当なものと考える。

以上をふまえると、「蝦蟇」「蝦夷」は表音語だったことになるが、中国語としての漢字には、表音語とともに表意語としての機能もある。

「蝦蟇」「蝦夷」表記を構成する語彙のうち、「夷」は、中国の伝統的な中華観に基づく東の異民族（律令国家日本の所謂エビス）を指すことについては疑問の余地はない。また、「蟻」については、山に棲む虫や鳥をあらわす語であり、「蝦」は「蝦」に同じくエビの意で、鬚の長いことなどの毛深さの表現とされる。「えみし」の多毛性については、『唐書』『東夷伝日本』、『通典』『边防一蝦夷』、『唐會要』『蝦夷国』に鬚が四尺に及ぶなど見え、それは、斉明朝の唐への遣使記録「同五年七月三日紀」所収の「伊吉連博徳書」の内容に通じ、「蝦蟇」「蝦夷」は「えみし」のそうした風俗や風貌をあらわしたものとされる。

また、宋代のことを記す『宋史』が、唐代における「蝦蟇」「蝦夷」に対応する「夷人」について、「身面皆に毛有り」「外国伝日本」とするのも、そうした認識を継承するものである。アイヌの多毛性、就中豊かな髭をたくわえた男子の特徴的な風貌は、それがアイヌのイメージとして誇張され過ぎてきた嫌いもなくはないが、民族誌がおしなべて記すところでもある。既述したように、歴史的にアイヌの祖先集団の一部を構成する「えみし」と倭国・日本を構成してきた主体としての倭人・和人とは、形質的にも差異があつた可能性が指摘し得る。既述したように、「蝦蟇」「蝦夷」が唐代におけるアイヌの祖先集団を表記するものであつたと考えられることをふまえると、「蝦蟇」「蝦夷」が表意的に用いられた可能性も否定できないことになる。

ただ、唐代の中国において、日本に先立って既に併用されていたとみられる「蝦蟇」「蝦夷」の用字を構成する語彙にあつて、多毛を意味するのは「蝦」である。こうしたことから、旧稿において、中国唐にあつ

ては、倭国北東方の海島、即ち北海道に住む多毛と伝え聞く異民族「カイ」の音を写すにあたり、それにふさわしい用字として、「蝦」に続け「蟻」、並びに「夷」を用いた可能性について提起した。⁶⁷⁾
以上をふまえ、「蝦蟇」「蝦夷」の用字については、唐が「カイ」の音を優先させつつも、伝え聞く道南西部「えみし」の風俗・風貌としてふさわしい表記によつたとする仮説を再提起するものである。

五 「毛人」「蝦蟇」「蝦夷」「窟説」「屈説」についての整理

唐代の歴史について記す中国文献のうち、『旧唐書』には「蝦蟇」「蝦夷」のことは見えていないが、日本の「東界北界」「大山」の外に「毛人の国」があるとしている「東夷伝倭国・日本国」。これに対して、『唐書』は、既述したように、新たに「海島中」に「蝦蟇」が居住することを記す一方で、日本の「東北に大山を限」て「毛人」が住むとしている「東夷伝日本」。そして、『通典』『唐會要』には「海島中の小国」として「蝦夷」が見えているが、「毛人」のことは見えていない。

既述した斉明五年の遣唐使は、倭国側の記録では「蝦夷」男女二人を伴い、それが「道輿蝦夷」、即ち陸奥の「えみし」とされ「同年七月三日紀」、同条所収の「伊吉連博徳書」も、その「蝦夷」について「熟蝦夷」と記すなど、一連の整合性を有している。すると、「蝦蟇」「蝦夷」が「海島中」にあるとする唐側の記録は、倭国側のそれと齟齬するものとなり、こうした唐側の認識は、倭国から得た情報に基づくものではなく、倭国と海を隔てた「蝦蟇」「蝦夷」に対して、倭国と陸続きの「毛

人」が併存するという独自の認識によるものだったことになる。⁽⁸⁾

そもそも、「毛人」は、中国古典上の「毛民」に同じく、中国北東方にあったとされる多毛な人々に由来すると考えられる。⁽⁹⁾そして、倭国・日本の「毛人」は、五世紀後半に成立したとされる『宋書』所収の所謂「倭王武の上表文」に初見するが、当時の倭国勢力の東日本への展開、即ち前方後円墳を始めとする定型化した古墳の造営状況などから、五世紀後半の倭国においては、中国古典上の「毛人」表記と倭国側の「えみし」を含むエミシ認識とが既に結び付いていたと考えられる。⁽¹⁰⁾後代の『宋史』は、唐代の「蝦蟇」「蝦夷」に対応する、日本国の「東境」に接する「海島」の「夷人」について記す一方で、同時に日本国と陸続きの「東北隅大山」「山外」の「毛人」についても記している。『宋史』の「毛人」については、歴史的な(過去の)認識の混入で、日本北東方に「毛人」が居住するという中国側認識は、概ね唐代までは存続するものの、宋代には実体を失っていたと理解される。

それでも、『宋史』に見る「毛人」は、唐代以前、南朝宋代以来の倭国・日本側からの情報に基づく一連の認識に基づくものだったことは明らかである。既述したように、斉明五年の唐への遣使以前の倭国では、「えみし」を表記する用字には「毛人」が用いられていたと考えられる。すると、倭国側は、斉明五年のある時期まで「えみし」を一括して「毛人」に表記していたのに対して、唐側は、倭国と陸続きの東北北半域に住む「えみし」を「毛人」に、道南西部の「えみし」を「蝦蟇」「蝦夷」に別記したことになる。

「蝦蟇」「蝦夷」の用字が、アイヌの祖先集団の自称 *aynu* などに由来

すると考えられることについては既に述べた。また、歴史上のアイヌ人名には、*Koshamayn(u)*、*Shakusyayn(u)* などにみるように、語尾に *ayn* (E) の音がしばしばあらわれる。これはアイヌ男子の自称である *aynu* と密接に結びつくもので、アイヌは、実際には *ayn* (E) がつかない名前でも、あらたまつて呼ぶ時には、「イポッスネ」アイヌ、「安之助」アイヌなどのように、実際の名の後に *ayn* (E) をつけて呼ぶ場合がある。⁽¹¹⁾

一方、国史上には「えみし」人名がいくつか見え、中にはアイヌ語による解釈が可能なものも含まれているとされるものの、*ayn* (E) を語尾にもつ人名は皆無である。そして、これら国史上の「えみし」人名は、そのほとんどが東北北半域のものである。すると、東北北半域にあった「えみし」は、アイヌ語系言語は有していたものの、*aynu* を自称しておらず、唐代の中国において、「蝦蟇」「蝦夷」とされた集団ではなかったことになる。

こうしたことをふまえ、筆者は、旧稿において、唐代中国では、倭国・日本側認識の「えみし」を「毛人」に、道北東部集団を「蝦蟇」「蝦夷」に別記し、自称 *aynu* もまた、「えみし」に由来するものではなく、道北東部集団によるものではなかったかとする問題提起を行った。⁽¹²⁾

しかし、「えみし」社会は、道央を中心とする後北文化を中核として成立した「拡大文化圏」南半を構成するもので、次に述べるように、東北北辺以北の「えみし」を含む「拡大文化圏」を構成した集団の主体は、後世のアイヌへと連なっている。すると、アイヌへと連なる集団の自称 *aynu* や親族呼称 *kaynu* などの音写とみられる「蝦蟇」「蝦夷」の用字もまた、後北文化の拠点である道央の集団に由来することになる。

しかも、国史上に見える道南西部「えみし」、即ち渡島「えみし」の可能性がある人名は、わずかに「問莞蝦夷」とされる「膽鹿鳴」「莞穂名」〔斉明五年三月紀〕、並びに「越度鳴蝦夷」とされる「伊奈理武志」〔持統一〇年三月一二日紀〕程度で、他は、すべて東北北半域のものであった。従って、渡島「えみし」にあつて、語尾に *aym(e)* の音を有するものが国史に記されることがなかったに過ぎないとも考えられ、「えみし」人名語尾に *aym(e)* の音を有するものがなかったと即断すべきではなかつた。また、東北北半域の「えみし」人名語尾に *aym(e)* の音がみとめられないのは、*aynu* を自称するなど、アイヌとしてのアイデンティティー¹⁶⁾ 成立以前に和人化した結果であると考ええる。

以上の反省をふまえた再検討の結果、中国唐は、倭国・日本と陸続きの東北北半域に住んだ「毛人」と道南西部の「蝦蟇」「蝦夷」とを別記しており、「蝦蟇」「蝦夷」表記は、道央を中心とするアイヌの祖先集団の一部である渡島「えみし」の自称 *aynu* などを音写したものだつたとする仮説を提起した。¹⁶⁾

さらに、既述したように、唐代の中国文献に見える靺鞨諸部の一つとされる「窟説」「屈説」についても、その用字の音がカイ・クイに近く、「蝦蟇」「蝦夷」と同様、後世のアイヌへと連なる集団の自称 *aynu* などに由来するものと理解される。また、唐代の樺太には、アイヌの祖先集団が居住していなかつたことが知られ、「窟説」「屈説」もまた、『唐書』『唐會要』の記録から、北海道に比定することに大きな矛盾はない。やはり、唐代中国文献上では、「蝦蟇」「蝦夷」は日本との関連で記されるのに対して、「窟説」「屈説」は、「窟説靺鞨(屈説)」として、「(黒

水)靺鞨」との関わりで登場することをふまえると、中国に北方經由で知られたのが「窟説」「屈説」であり、日本經由で知られたのが「蝦蟇」「蝦夷」だつたとする指摘は妥当なものと考える。

そして、「窟説」「屈説」が北方經由で中国に知られたことをふまえると、それは、道南西部の「えみし」ではなく、道北東部におけるアイヌの祖先集団に由来する可能性が高い。旧稿において、筆者は、「蝦蟇」「蝦夷」の用字について、五世紀以降、道北東沿岸部に展開したオホーツク文化(唐代中国文献の所謂「流鬼」と接した擦文期初頭の道北東部におけるアイヌの祖先集団に由来するもので、流鬼を通じて黒龍江流域の黒水靺鞨などを介して、中国唐に伝えられたものと考えた。¹⁷⁾ しかし、既述した検討結果から旧稿を見直し、オホーツク文化(「流鬼」)を通じて中国唐に知られた道北東部におけるアイヌの祖先集団は、「窟説」「屈説」だつたとする仮説を新たに提起するものである。

六 アイヌ社会の形成と自称 *aynu*

倭国が斉明五年に唐へ遣使した際、唐側は、倭使が伴つた陸奥「えみし」(即ち、倭国側の所謂「毛人」)について、倭国との関わりの中で独自に情報を得ていた *aynu* を自称する道央を中心とする渡島「えみし」(即ち、唐側の所謂「蝦蟇」「蝦夷」)に誤認したと推察されることは既に述べた。その要因については、既述したように、「えみし」社会が、ある程度の地域差はあるにせよ、相通じる文化や価値観を共有するとともに、形質面でも類似していた可能性が指摘できる。それはまた、「え

みし」社会において、「共通文化圏」の伝統を継承する形で通婚・交易・アイヌ語系言語圏が維持されたことによるものと理解される。⁷⁸⁾

七世紀後半の北海道は、概ね擦文文化初頭に位置付け得る北大Ⅲ式期にあり、そのうち道南西部の渡島「えみし」社会は、既述したように、東北北半域の「えみし」社会と一連の通婚・交易圏を構成していたと理解される。そして、「えみし」社会においては、アイヌ語系言語が用いられたと考えられるが、今日残る北海道の地名は、日本語起源のもの以外、おしなべてアイヌ語に由来することなどをふまえると、同時代の道北東部の人々もまた、アイヌ語系言語を有していたと考えられる。また、擦文期の北海道においては、アイヌの祖先集団が多少の形質的、文化的地方差をもって生活していたと考えられ、道南西部擦文社会の主体である渡島「えみし」とそれに接する道北東部の集団とは、「拡大文化圏」を構成する中で言語を始めとする文化面、形質面での齊一化を深めていたと理解される。すると、既述したアイヌとしてのアイデンティティもまた、「拡大文化圏」における齊一化の深化の過程で、全道アイヌ社会の共有するところとなったと解される。

既述したように、一二〜一三世紀には、北海道における擦文文化が終焉を迎え、やがて、一四世紀にはアイヌ文化が成立すると理解されている。すると、アイヌ文化は、一二〜一三世紀を通じて成立へと向かったことになり、近年、そのことを裏付ける資料も急速に増加してきている。⁸²⁾ 一方、樺太とともに千島列島には、後北C・D式期以降、北海道起源の北大式土器群が展開せず、擦文文化の遺跡も存在しないとされ、後期の擦文土器が樺太南部や国後島などに及んでいないに過ぎない。⁸³⁾ しかし、

『元史』や『経世大典』序録に見える樺太アイヌと元王朝との交戦記録をふまえると、北海道アイヌの樺太進出は、一三世紀後半を降るものにはあり得ない。⁸⁴⁾ また、千島列島などにおいても、樺太と同様の状況を想定するのが自然である。やはり、アイヌが北海道から樺太・千島列島などへと進出する前提となるアイヌ社会は、擦文文化が終焉を迎える一二〜一三世紀を通じて成立したと理解される。

一方、滋賀県信楽町玉桂寺阿弥陀如来立像胎内から発見された交名帳には、「エソ三百七十人」の名が記されている。⁸⁵⁾ 玉桂寺阿弥陀如来立像の製作年代は、同じ胎内の願文によつて建暦二年（一一二二）以前とされ、交名帳と願文との成立年代に大きな開きがなければ、同交名帳の成立は一三世紀前半頃となる。そして、これら「エソ」交名は、同交名帳にみる一般の人々とは異なり、無姓のものが多く、非人や下人・所従に共通する身分的特質がみられ、古代の近江には多数の俘囚が移配されていることから、これら俘囚の子孫とする見解もみられる。⁸⁶⁾

しかし、エソ認識は、奥六郡の安倍氏や山北三郡の清原氏に代表される俘囚勢力（エビス）が日本とは異質な北方地域を対象として用いたものと考えられ、エビスが律令期には「えみし」に対する異類認識で、王朝期には俘囚などを指すものとなったのに対して、エソは中世日本の異民族認識として評価すべきものと考えられる。⁸⁷⁾ また、同交名帳第一七丁左一四行目に見える「あんとう」なる人物について、津軽安藤氏一族で「エソ」を率いた人物とみる指摘もある。⁸⁸⁾ さらに、「エソ交名」には、「いぬ」「ういぬ」の名が多数見え、後世の事例ではあるが、アイヌ人名語尾の -vnu(n) の音は「く犬」によつて写される例が知られることなどを

ふまえると、同史料は、一二世紀前葉までには東北北辺に *aynu* を自称する「えぞ」、即ちアイヌが出現していたことを示すものと考える。⁽⁸³⁾ やはり、アイヌ文化成立の前提となるアイヌ社会の形成は、擦文文化が終焉を迎える一二〜一三世紀に北海道旧擦文文化圏、並びにそれと密接な関係にあった擦文土器が濃厚に展開した東北北辺において始まっていると理解されるのである。

以上をふまえると、アイヌ社会は、一二〜一三世紀の成立時点で、北海道を中心として東北北辺にまで及び、その後、樺太南部、並びに千島列島やカムチャツカ半島などへと展開していったと解される。そして、近世盛岡藩域の下北半島、並びに弘前藩域の夏泊・津軽半島などにあつた「狄」も、人名語尾に *aynu* を有するものが散見される。⁽⁸⁴⁾ また、近世東北北辺のアイヌの多くは、日常は日本語を用いたにはしても、*aynu* を自称し、アイヌ語を理解するものがあつたと考えられ、本州アイヌは、近世に至るまで東北北辺に足跡を残したのである。

今日の北海道アイヌ語は、後北文化を始めとするアイヌ語系言語を母胎として、北大・擦文期を通じて「拡大文化圏」が言語上の均質性を深化させる過程で、全道集団、即ちアイヌの共有するところとなつたと理解される。⁽⁸⁵⁾ 同様に、歴史的にアイヌ文化へと連なる「拡大文化圏」は、道央を中心とする後北文化を中核として成立していることをふまえると、*aynu* などの称もまた、既に後北文化に内在していたもので、後北C₂式期後半〜C₂・D式期以降、全道へ展開していったと理解される。

次に述べるように、こうした自称の共有はまた、民族（エトノス）の問題とも密接に関わるものでもあることをふまえると、「拡大文化圏」

の形成は、その南半を構成した「えみし」社会を成立させる一方で、道央を中心とする地域において、後世アイヌ民族へと連なるエトノスの萌芽ともなつた可能性が浮上することになる。

七 「えみし」社会の成立とアイヌ民族へと連なるエトノスの初源（むすび）

一般には、民族（エトノス）とは、特定の個別文化及びそれへの帰属意識（アイデンティティー）を共有する集団とされ、シロゴゴロフが主張するように、民族の前提は他とは異なる「われわれ意識」の存在であり、孤立した少数民族の間に存在する「人間」「男」を意味する自称の共有などは、そうしたアイデンティティーの原初形態として位置付けられる。⁽⁸⁷⁾ 従つて、エトノス形成は物質文化というよりも、精神的紐帯に負うところが大きいと理解される。これに従えば、アイヌ男子の自称 *aynu* の共有もまた、アイヌ民族形成に至る原初形態と理解される。

物質文化よりみたアイヌ文化の成立が一四世紀とされることについては既に述べたが、アイヌ民族の形成については、エトノスのとらえ方の相違によつて諸説がみられる。例えば、擦文期のアイヌ社会を土台としつつ、一四世紀を画期として形成され、コシヤマインの戦いを始めとする長期にわたる和人との戦いの中で、そうしたアイデンティティーが強化されていったとする指摘がある。⁽⁸⁸⁾ その一方で、アイヌ文化時代の初期がチャシや英雄叙事詩に反映されるような激しい対立の時代で、民族としてのアイデンティティー成立以前であつて、和人とは異なるアイヌ民

族としての意識がはぐくまれるのは、シャクシャインの戦い以降の和人による圧制下であったとする解釈もみられる。⁹⁸⁾

また、アイヌ民族文化の中核をクマ祭文化複合体としてとらえ、アイヌ民族は定住集落の形成・仔グマ飼育型クマ祭の確立・金属器の普及といった諸段階を経て形成されたとする見解も示されているが、仔グマ飼育型クマ祭り（イオマンテ）が確立されるのは、考古学上の送り場遺構の検出例などから一八世紀以降とされる。⁹⁹⁾ しかも、近世東北北辺のアイヌには、イオマンテなどの「送り」が行われた形跡はなく、精神文化の面で津軽海峡をはさむ南北のアイヌ社会には懸隔が生じていたとみなければならない。¹⁰⁰⁾ 従って、クマ祭文化複合体の成立を重視する理解に従えば、アイヌ民族の形成は、東北北辺に及ぶものではなく、北海道以北における一八世紀以降にまで降ることになる。

こうしたことをふまえると、アイヌ民族の成立期は、エトノスを如何にとらえるかによつて大きく異なるものとなるが、ここでは、上限を一四世紀、下限を一八世紀にわたる幅でとらえておく。

それでも、歴史的にアイヌ社会へと連なる「拡大文化圏」は、道央を中心とする後北文化を中核として成立していることをふまえると、自称 Ainu などにもみられるアイヌ民族のエトノスの起源もまた、後北文化に濫觴をなし、後北 C₁ 式期後半～C₂・D 式期以降、全道へと展開していったと理解される。また、「拡大文化圏」の形成は、その南半に「えみし」社会を成立させる一方で、「えみし」社会北半を構成する道南西部を含む北海道において、後世アイヌ民族へと連なるエトノスを萌芽させたと理解し得ることについて提起するものである。

なお、本小論は、主として平成一五年一二月二〇日に盛岡市で開催された「第二三回蝦夷研究会」で筆者が行った口頭発表『「えみし」社会の成立とその系統的位置付けについて』の一部に拠つて作成した。

註

(1) 本小論は、新潟県を含む東北地方について、およそ盛岡市と秋田市とを東西としてそれ以北を北半北域に、その南から大崎平野と山形盆地を含む宮城・山形両県北部、並びに新潟県平野の北までを北半南域に、その南の仙台平野と米沢盆地を含む宮城・山形両県南部、及び新潟県平野までを南半北域に、その南の宮城県南辺、福島県域、新潟県南部を南半南域に規定する。なお、青森県域津軽平野以北や下北地方などについては東北北辺に、大崎平野や山形盆地を中心とする宮城・山形両県北部については同北半南辺にも表記する。

(2) 北海道の気候・植生は石狩・苫小牧低地帯、ないしは留萌―深川―札幌―苫小牧を結ぶ線で、南西部の冷温帯段階の植生と北東部の亜寒帯段階の植生とに二分され、文化も同様に、縄文時代以降、続縄文時代後葉に至るまで、概ね道南西部は東北地方、就中その北部と共通する文化を有してきたのに対して、道北東部は、南西部とは異なる独自の文化圏を形成してきたとされる〔吉崎昌一「北海道における地域性」〕岩波講座日本考古学』五（文化と地域性）（岩波書店、一九八六年）〕。

(3) 東北地方、就中その北半域には、弥生文化、並びに次代の古墳文化に基づく社会が展開したとはみなし得ず、そうした文化を前提とする弥生時代、古墳時代などの用語の使用は、適切ではないと考えられる〔大阪府立弥生文化博物館『みちのく弥生文化』〔平成五年春季特別展図録〕（一九九三年）他に示唆を得た〕が、他に代替すべき時代区分がないこ

とから、便宜的に日本史上の時代区分に従っておく。

- (4) 富樫泰時「円筒土器分布圏が意味するもの」『北奥古代文化』第六号（一九七四年）、同じく富樫「円筒土器様式と大木土器様式」『北からの視点』（日本考古学協会一九九一年度宮城・仙台大会実行委員会、一九九一年）。また、こうした共通性の強い文化圏が成立する背景として、気候を始めとする類似した自然環境を基盤とする生態系が深く関与していると考えられる〔註（2）吉崎前掲、並びに藤本強『もう一つの日本文化』（東京大学出版会、一九八八年）、羽賀憲二「二つの文化系統」『新版古代の日本』第九巻 東北・北海道（角川書店、一九九二年）〕。
- (5) 縄文時代の該地域に展開した前期の岩偶や石冠、中期末〜後期の青竜刀形石器、後期の舟形土製品、晩期のS字状入組文を有する石剣類などは、「第二の道具」とも称されるように、呪術や祭儀などの精神文化ともわがち難く結びついていた「なお、文化要素個々についての参考文献等は女鹿潤哉『『えみし』成立過程についての研究—『えみし』『えぞ』とその系統—展示に向けての一視点—』『岩手県立博物館研究報告』第一九号（二〇〇二年）参照のこと〕。
- また、縄文時代後期〜弥生時代中期・恵山期並行期において、東北北半北域と道南西部を中心とする地域には、素材や形態に地域差がみとめられるものの、クマを意匠した造形がみられ、それらは、クマに対する共通の祭儀を背景として製作されたと理解される〔女鹿「縄文時代後期〜弥生時代中期・恵山期の『クマ意匠』について」『祭祀考古学』第二号（二〇〇〇年）、同じく女鹿『クマ祭儀』の行方 縄文時代後期〜弥生時代中期の北部東北地方と北海道における『クマ意匠』をめぐる一考察』『北海道考古学』第三六輯（二〇〇〇年）他〕。
- (9) G. Childe What Happened in History (Pelican Books, 1954) [今来陸郎・武藤潔訳『歴史のあけぼの』（岩波書店、一九五八年）に拠った〕。

(7) 上野佳也『縄文コミュニケーション—縄文人の情報の流れ—』（海鳴社、一九八六年）。

(8) 福田友之「縄文時代の物の移動・人の移動」『北からの視点』（註（4）富樫一九九一年前掲に同じ）に拠った。

(9) 縄文社会復元のモデルとしては、類似した生態学的条件の下に、類似した経済形態や文化段階をもつカリフォルニア・インディアン、北東アジア漁撈民、北方ユーラシア狩猟民が好例とされる。こうした民族例との比較において、縄文社会では、夫方居住婚が行われた可能性が高く、一方的な妻方居住婚が行われた可能性はほとんどないとされる〔大林太良「縄文時代の社会組織」『季刊 人類学』二二（一九七一年）〕。

また、縄文土器様式の中の型式面における均質化・斉一性は、型式を同じくする小地域集団間で土器作りに携わる女性の婚姻関係が存在したことによって保持されたと考えられる〔永峯光一「五 土器作りと土器作り」『日本原始美術大系』3 土偶 埴輪（講談社、一九七七年）〕。こうした土器様式の地域的展開については、夫方居住に基づく外婚制を背景とした通婚圏とともに、地域の紐帯の基盤として最大の社会組織である部族社会の存在も想定されている〔谷口康浩「縄文時代の親族組織と集団象としての土器型式」『考古学雑誌』七二（一九八六年）〕。

(10) アイヌ文化の成立については、物質文化上の所見などから一四世紀とされる「榎森進」講演④ アイヌ民族と安藤氏」『藤崎シンポジウム「北の中世を考える」津軽安藤氏と北方世界』（小口雅史編、河出書房新社、一九九五年）。これに従えば、古代にはアイヌ語の前提となるアイヌ社会、並びにアイヌ文化は成立していないから、「共通文化圏」における言語について、アイヌ語そのものとはみなし得ず、今日のアイヌ語と近縁な「アイヌ語系言語」に規定するものである。

(11) 天王山式土器の成立については、口縁部の突起、縦走・横走する縄文

などの特徴から、東北北半域の土器に系譜をたどれるとされる「弥生時代研究会『天王山式期をめぐって』の検討会記録集』（一九九〇年）に拠った」ものの、その中心が東北北半域にあるような展開のあり方を示していない。また、該期には、東北北半域から道南西部を中心として行われていた、クマに対する祭儀に基づいて製作されたクマを意匠した造形も消滅しており、天王山文化には、東北北半域の地域性を解体させる性格がみてとれる〔註（5）女鹿二〇〇〇年前掲二論文他〕。弥生時代後期には、気候の寒冷化が指摘されており、東北地方全域の収斂にあたっては、そうした環境によって形成された生態系に最も適応し得る東北北半域の生活・文化の形態が選択されたものと考ええる。

- (12) 樺太・千島には、後北C₂・D式土器に後続する北海道起源の北大式土器群は展開せず、北大文化と東北北半の文化の融合によって北海道に成立する擦文文化の遺跡も存在しないとされ「菊池俊彦「オホソツク文化の起源と周辺諸文化との関連」『北方文化研究』一一（一九七八年）」、後期の擦文土器が樺太南部や国後島などに及んでいるに過ぎない「中田裕香「北海道の古代社会の展開と交流」『古代蝦夷の世界と交流』（名著出版、一九九六年）」。これに対して、東北北半側では、後北文化を構成する要素が広範に出現し、該地域から道南西部にわたる文化要素、相通じる価値観の共有は、概ね古代を通じて保持されている「女鹿『「えみし」と『えぞ』についての一考察』『北奥古代文化』第二十六号（一九九七年）、同じく註（5）女鹿二〇〇二年前掲他」。なお、女鹿『古代「えみし」』社会の成立とその系統的位置付け」『岩手県立博物館調査研究報告書第一八冊』（二〇〇三年）において、その集成結果等を公表した。

- (13) このことの詳細については、註（12）女鹿二〇〇三年前掲参照。
(14) 註（12）女鹿一九九七年、同じく註（5）女鹿二〇〇二年前掲他。
(15) 註（14）に同じ。なお、後北・北大文化が擦文文化に連なり「桜井清

彦「考古学から見た蝦夷」『日本古代文化の探究 蝦夷』（社会思想社、一九七九年）、擦文文化がアイヌ文化へと連なる「桜井清彦「擦文文化に関する若干の問題」『史観』第五六―六七冊（一九六二年）』『北奥の古代文化』（學生社、一九七五年）再録に拠った」ことについては、既に指摘があり、近年では、（財）アイヌ文化振興・研究推進機構「よみがえる北の中・近世掘り出されたアイヌ文化」（同名展示会図録、「社」北海道ウタリ協会、二〇〇一年）などにより、大方の支持が得られつつある状況と考える。

- (16) 古代の始まりについては、前方後円墳成立以後の倭人社会が前方後円墳を頂点とする政治秩序（前方後円墳体制）に基づく国家段階であり、古代国家前半期に位置付け得るとする理解「都出比呂志「日本古代の国家形成論序説 前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』第三四三号（一九九一年）」に従い、古墳時代前期とする。また、概ね一〇世紀以降の王朝国家段階における名を単位とする課税形態に基づく国衙・荘園体制が中世社会の基盤となっていることを積極的に評価し、一〇世紀前半を古代の終末期とみなす。

- (17) 註（5）女鹿二〇〇二年、同じく女鹿二〇〇三年「文化要素の共有と交易よりみた『えみし』社会の紐帯」『北海道考古学』第三九輯（二〇〇三年他）。

(18) 「蝦夷」などの漢字表記、並びにエミシという呼称・認識は、後述する倭国ないしは律令国家日本側の認識であり、該地域在地集団の自己認識に基づくものではない。こうしたことから、筆者は、該地域在地集団の主体について、便宜的に「えみし」に規定するものである。

- (19) 註（5）女鹿二〇〇二年、同じく女鹿「後北C₂・D式土器の東北北半への展開と『えみし』社会の成立」『北海道考古学』第三八輯（二〇〇二年、以下女鹿二〇〇二年bに表記する）、同じく女鹿『「えみし」社

会の成立と倭国」『弘前大学國史研究』第一一三号（二〇〇二年、以下
女鹿二〇〇二年cに表記する）。

(20) 註(12) 女鹿二〇〇三年前掲。

(21) 石附喜三男「鈴谷式土器の南下と江別式土器」『北海道考古学』第一
二輯（一九七六年）、同じく「考古学からみた肅慎」『日本古代文化の探
究 蝦夷』(註(15) 桜井一九七九年前掲に同じ)。

(22) 註(2) 古崎前掲。

(23) 上野秀一「北海道における天王山式系土器について—札幌市K135
遺跡4丁目地点出土資料を中心に—」『東北文化論のための先史学・歴
史学論集』(加藤稔先生還暦記念会、一九九二年)。

(24) 右代啓視「オホーツク文化の年代学的諸問題」『北海道開拓記念館年
報』第一九号（一九九一年）、同じく右代「オホーツク文化にかかわる
編年的対比」『北の歴史・文化交流研究事業報告』(北海道開拓記念
館、一九九五年)。

(25) 註(24) 右代前掲。

(26) 註(24) 右代前掲、並びに大沼忠春「北海道の古代社会と文化」『古
代蝦夷の世界と交流』(註(12) 中田前掲に同じ)。

(27) オホーツク文化に並行する北海道統縄文後期く擦文期における生業と
しては、河川流域での鮭を主体とする漁や畑作農耕などが大きな比重を
占めたことが判明している。「吉崎昌一・椿坂恭代「附編—二 サクシュ
コトニ川遺跡にみられる食料獲得戦略」『北大構内の遺跡』八(北海道
大学、一九九〇年)、並びに、上野秀一「本州文化の受容と農耕文化の
成立」『新版古代の日本』第九卷(角川書店、一九九二年)、山田悟郎
「日本列島北部で展開された雑穀農耕の実態」『北海道開拓記念館研究
紀要』第二六号（一九九八年）に拠った。これに対して、オホーツク
文化の生業の主体は、沿岸における漁撈、海獣狩猟などであったと理解

される「西本豊弘「生業研究における石器・骨角器の意味」『古代史探
叢 滝口宏先生古稀記念論集』(早稲田大学出版会、一九八〇年)」。

このことの詳細については、註(5) 二〇〇二年前掲、並びに註
(19) 女鹿二〇〇二年b・c前掲参照。

(28) 註(19) に同じ。

(29) 松木武彦「倭国乱」から倭王武の「山川跋涉」まで 「戦い」から
『戦争』へ「古代国家はこうして生まれた」(角川書店、一九九八年)、
並びに寺澤薫「第五章 情報の争奪と外交」『日本の歴史〇二 王権の
誕生』(講談社、二〇〇〇年)。

(30) 邪馬台国の位置について、庄内式土器、初現期前方後円墳、三角縁神
獸鏡の展開状況などから、今日では、畿内大和にあったことが確実とさ
れ「国立歴史民俗博物館『邪馬台国時代の東日本』(一九九一年)他」、
邪馬台国連合は、二世紀末には、畿内を中心とする西日本広域にわたつ
たとされる「白石太一郎「邪馬台国時代の畿内・東海・関東」『邪馬台
国時代の東日本』(前掲)、同じく「古墳と邪馬台国」『古墳の語る
古代史』(歴博ブックレット⑥)(財団法人歴史民俗博物館振興会、一九
九八年)、『古墳とヤマト政権』(文藝春秋、一九九九年)。

(31) 註(23) に同じ。

(32) 註(19) に同じ。

(33) 邪馬台国連合と抗争し得た狗奴国についても、同時期の遺跡の規模や
数、東海系土器や前方後方形墳墓など東海系要素の東漸などによって濃
尾平野「註(30) 白石前掲」、ないしは弥生時代後期の菊川式土器の展
開、久努の地名や古代の久努連などとの関連から遠江東部「山尾幸久
「邪馬台国と狗奴国の戦争—西日本の東端と東日本の西端—」『邪馬台
国時代の東日本』(註(30) 国立歴史民俗博物館前掲)など、東海地方
西部にあてられる見解が有力である。また、邪馬台国連合に取り込まれる以

前の東日本には、狗奴国を中心とするゆるやかな連合体が形成されていたともされる〔註(30) 白石前掲〕。

- (34) 女鹿「東北北半域における弥生時代終末期と古墳時代前期」『岩手考古学』第一三号(二〇〇一年)、同じく女鹿「古墳時代における『えみし』の位置付けについて」『弘前大学國史研究』第一一〇号(二〇〇一年)。

- (35) 註(19)に同じ。

- (36) 本節に述べたように、西日本を中心とする倭人社会の政治的統合の進展を経て、東日本広域をも巻き込んだ倭国成立に至る緊張が、後北C・D式土器の東北北半域への広範な展開に象徴されるように、「えみし」社会を成立させたと理解するものである〔註(19)に同じ〕。

- (37) 註(29) 寺澤前掲。

- (38) 佐伯有清「古代蝦夷史についての一考察」『北方文化研究』一七(一九八五年)。

- (39) 女鹿「用字変遷より見たる古代『えみし』についての一考察」『弘前大学國史研究』第一〇四号(一九九八年、以下、女鹿一九九八年aに表記する)、同じく女鹿「毛人・蝦蟇・蝦夷の意味と考古学」『岩手考古学』第一〇号(一九九八年)。

- (40) 新編増補国史大系本に拠った。

- (41) 白鳥庫吉「唐時代の樺太島に就いて」『歴史地理』第九卷五・六号、第一〇卷二・四・六号(一九〇七年)、『白鳥庫吉全集』第五卷(岩波書店、一九六〇年)に拠った、並びに和田清「支那の記載に現はれたる黒龍江下流域の土人」『東亜學』第一輯(一九三九年)、洞富雄「三、黒龍江下流域および樺太の原住民」『樺太史研究』(新樹社、一九五五年)。(42) 小川真子「アムール下流域の『クイ』に由来する氏族について」『フオクロー』三(ジャパン・パブリッシャーズ、一九七八年)。

- (43) 児島恭子「エミシ、エゾ、『毛人』『蝦夷』の意味」『竹内理三先生喜寿記念論文集 上巻 律令制と古代社会』(竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編、東京堂出版、一九八四年)。

- (44) 註(38) 前掲。

- (45) 註(43) 前掲。

- (46) 『通典』『唐會要』にも、同じ年の高宗の顕慶四年(六五九)に「蝦夷」が倭国の使者とともに入唐したことが見えていることも整合する。一方で、『唐書』では、「蝦蟇人」を伴った倭国の遣使について、「天智」即位の「明年」になされたとも読みとれる記述となっていることから、天智二年(六六三)にあてる見解もみられる〔大林太良「民族学からみた蝦夷」『日本古代文化の探究 蝦夷』(註(15) 桜井前掲に同じ)〕。しかし、斉明五年七月三日紀の遣使記事、就中その際の倭国側の記録とされる「伊吉連博徳書」の内容は、既述した『通典』『唐會要』『唐書』とよく整合しており、既述した中国文献三書がほとんど同じ内容である。従って、『唐書』に見える遣使も、『通典』『唐會要』に同じく、顕慶四・斉明五年(六五九)のことと理解すべきである〔註(43)、並びに小口雅史「蝦夷」表記論の新展開―『文化における北』〔昭和六二・六三年度特定研究報告書〕(弘前大学人文学科、一九八九年)〕。以上をふまえると、唐代の中国においては、斉明五年に倭国の使者が伴った「えみし」を「蝦蟇」「蝦夷」に表記したことになる。
- (47) 註(39) 前掲。
- (48) 註(39) 前掲。
- (49) 註(39) 前掲。
- (50) 和田清「唐代の東北アジア諸國」『東方學』第八輯(一九五四年)。ただし、註(41) 和田前掲においては、黒龍江下流域のギリヤークに比定している。

(51) 擦文化がアイヌ文化の母胎となっていることについては、註(15)

桜井一九六二年、同じく桜井一九七九年前掲他に拠った。

(52) 註(12) 菊池前掲。

(53) 大葉昇「クイ(骨鬼・蝦夷)・ギレミ(吉里迷)の抗争とオホーツク文化の終焉―元朝の樺太出兵と水達達経営に関わって―」『学苑』第七〇一号(一九九八年)。

(54) 註(53) 前掲。

(55) 喜田貞吉『『蝦夷』から『アイヌ』へ―名称の変遷―』『東北文化研究』

第二巻第一―四号(一九二九―一九三〇年)、『喜田貞吉著作集』第九巻(蝦夷の研究)(平凡社、一九八〇年)に拠った、並びに菊池徹夫「蝦夷(カイ)説再考」『史観』第一二〇冊(一九八九年)。

(56) 註(55) 喜田前掲。

(57) 金澤庄三郎「第三章 人生観」『言語に映じたる原人の思想』(大鑑閣、一九二〇年)。

(58) 註(55) 喜田前掲。

(59) 浅井亨「蝦夷語のこと」『日本古代文化の探究 蝦夷』(註(15) 桜井前掲に同じ)。

(60) 註(55) 菊池前掲。

(61) 註(39) 前掲。

(62) 註(55) 菊池前掲。

(63) 註(38) 前掲。

(64) 註(38) 前掲。

(65) 註(43)、並びに註(39) 前掲。

(66) 東北北半域において、古墳時代人骨の発見例は少ないが、宮城県石巻市五松山洞穴遺跡から出土した六世紀末―七世紀前半の豪族層とみられる一九体の人骨のほとんどは関東地方の古墳時代人骨に近いが、成人頭

骨二例には、アイヌとの類似もみとめられるという「山口敏」『石巻市文化財調査報告書』第三集(石巻市教育委員会、一九八八年)。また、山形県酒田市の離島飛島の洞穴から出土した人骨二〇体のうち、九世紀のものとはされる一体には、縄文人的な形質がみとめられるとされる「石田肇」『東北地方出土の古代人骨の形質について』『東北文化論のための先史学歴史学論集』(加藤稔先生還暦記念会、一九九二年)。すると、古代の東北北半南域の集団の多くは、骨格面においては関東地方の集団と差異がほとんどなかったことになる。

それでも、景行紀の「蝦夷」は、実録的とはいえないが、「飛禽」「走獸」に擬せられ「四〇年七月一日」、そこには記紀編纂時などにおける律令国家の「えみし」に対する認識が示されている。また、斉明紀は、倭国側が唐に派遣した使節が「道輿蝦夷」男女二人を同伴したことを記し「五年(六五九)七月朔」、同条所収「伊吉連博徳書」は、「えみし」を閲見した唐の高宗が、その「身面の異」に驚いたと記している。確かに、人の風貌は、風俗・風習などの生活・文化の諸要素によって形作られる面があることを否定するものではないが、「えみし」と倭(和)人との形質的な差異を示唆する史料は他にもある。

即ち、斉明五年以前の倭国公記録には、「えみし」を表記する用字として毛人が用いられたと考えられ「註(39) 前掲」、中国の「毛人」は、古典上で東方に住むとされる「毛民」に基づくもので、多毛を意味するとされ「註(43) 前掲」、事実、『山海経』「大荒北経」郭璞註や『淮南子』高誘註も「毛民」が多毛たとしている「註(46) 小口前掲」。既述したように、中国唐代の「蝦蟇」「蝦夷」は、倭国側公記録の「伊吉連博徳書」の内容にも通じる「註(38) 前掲」。さらに時代は降るが、永観元年(宋の雍熙元年、九八三)に入宋した東大寺の僧齋然は、宋の太宗に対して、唐代の「蝦蟇」「蝦夷」に対応する「海島」の「夷人」に

ついで、筆談によって「身面皆に毛有り」と回答している『宋史』外国伝日本国】。

以上をふまえると、中国及び倭国・日本側には、倭国・日本における「毛人」や「蝦夷」「蝦夷」について、多毛だとする認識があったことは疑いなく、それら一連の用字が歴史的に「えみし」を表記してきた要因であったと考える。倭国・日本と「えみし」社会との文化や社会構造上の本質的な差異が、相互の通婚関係を抑制する一方で、「えみし」社会内部における交易を始めとする交流の結果、通婚関係も、「共通文化圏」時代と同様に維持されることで、「えみし」と倭(和)人との間には、形質的にも差異が顕在化したと理解される【註(5) 女鹿二〇〇二年、並びに註(19) 女鹿二〇〇二年c前掲】。

(67) 註(39) 前掲。

(68) 註(43) 前掲。

(69) 註(43)、並びに註(46) 小口前掲。

(70) 既述した武の上表文奉呈に先立つ太祖の元嘉二年(四二五)、倭王讚が遣わした使者として司馬曹達が見えるが、この人物は、その名から中国系渡来人とみられる。司馬曹達については、永初二年(四二二)の遣使により、宋から將軍に任せられた讚が將軍府を設置し、僚属として帳史・司馬・參軍を置くに至ったもので、司馬を官職とみなす指摘がある【坂元義種「倭の五王」『国史大辞典』第十四卷(吉川弘文館、一九九三年)】。これに従うにしても、「曹達」という名から、中国系渡来人と理解することに問題はないと考える。従って、武の上表文が作成される半世紀以上も前に、倭国王権には中国系渡来人が仕えていたとするならば、倭国側は、中国古典上において東方に住むとされる「毛人」について知り得る環境にあったことになる【註(34) 前掲他】。

(71) 金田一京助『アイヌの研究』(八洲書房、一九二五年)。

(72) 註(59) 前掲。

(73) 註(12) 女鹿一九九七年、並びに註(39) 前掲。

(74) 古代史上の「渡嶋」については、津軽地方北部を含むものである【小口雅史「阿倍比羅夫北征地名考」『文経論叢』二七―三(弘前大学人文学部、一九九二年)、並びに「渡嶋再考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第八四集(「特定研究」古代における北方交流史の研究、二〇〇〇年)にはせよ、道南西部が主体であったと理解される【熊谷公雄「阿倍比羅夫北征記事に関する基礎的考察」『東北古代史の研究』(吉川弘文館、一九八六年)、並びに樋口知志「渡嶋のエミシ」『古代蝦夷の世界と交流』(註(12) 中田前掲に同じ)】。また、渡嶋が道南西部を主体とすることにについては、七〜八世紀の群集墳を始めとする墳墓群などから出土する副葬品、並びにその後の延喜交易雑物を始めとする北海道以北の物資と和産品との交易などからも明らかであると考える【註(19) 女鹿二〇〇二年c、並びに註(17) 女鹿二〇〇三年前掲】。

(75) 擦文文化は、一三〜一三世紀には終焉を迎えたと考えられる【大沼忠春「北海道の文化」『古代史復元 九 古代の都と村』(講談社、一九八九年)、並びに註(24) 右前掲】が、筆者の所謂「アイヌ」の定義は、擦文文化終焉後、全道から東北北辺にわたったと想定されるアイヌ語、並びに自称 *Ainu* を共有する社会を前提とするものである。

(76) 註(5) 女鹿二〇〇二年、同じく註(12) 女鹿二〇〇三年前掲。

(77) 註(73) に同じ。

(78) 註(5) 女鹿二〇〇二年、並びに註(17) 女鹿二〇〇三年、同じく註(12) 女鹿二〇〇三年前掲。

(79) 山田秀三「アイヌ語族の居住範囲」『北方の古代文化』(毎日新聞社、一九七四年)。

(80) 註(15) 桜井一九七九年前掲。

- (81) 註(73)に同じ。
- (82) 註(15) (財)アイヌ文化振興・研究推進機構前掲。
- (83) 註(12) 菊池、並びに中田前掲。
- (84) 『元史』や『経世大典』序録『元分類』所収に見える樺太アイヌと元王朝との交戦記事などから、アイヌの樺太進出は、一三世紀後半以降のものではあり得ない〔註(12) 菊池前掲〕。従って、その前提となるアイヌ社会の形成は、一二〜一三世紀の擦文文化の終焉によって将来されたと考えられ、北海道旧擦文文化圏、並びにそれと密接な関係にあった擦文土器が濃厚に展開する東北北辺において始まっていると理解される〔註(12) 女鹿一九九七年前掲、同じく女鹿『「えみし」「えぞ」の系統とアイヌ』『岩手考古学』第一号(一九九九年)〕。
- (85) 女鹿「ウフイ考―樺太アイヌの Mummification についての一考察―」『北海道考古学』第三二輯(一九九六年)、並びに榎森進「アイヌ民族の去就(北奥からカラフトまで)―周辺民族との『交易』の視点から―」『北から見直す日本史 上之国勝山館跡と夷王山墳墓群からみえるもの』(大和書房、二〇〇一年)。
- (86) 伊藤唯真「第三章 法然滅後における浄土宗教団の様相」『浄土宗の成立と展開』(吉川弘文館、一九八一年)、並びに「新編弘前市史」編集委員会「第一章 蝦夷・津軽関係編年史料」『新編弘前市史』資料編一―二 古代中世編(一九九五年)所収に拠った。
- (87) 入間田宣夫「中世エゾの人名について」『北からの日本史』(三省堂、一九八八年)。
- (88) 註(87)前掲。
- (89) 海保嶺夫「『擦文文化の文献史的解釈』『物質文化』三八(一九八二年)。
- (90) 註(12) 女鹿一九九七年、並びに(39) 女鹿一九九八年a前掲。
- (91) 小口雅史「安藤氏の栄光と落日」『図説青森県の歴史』(河出書房新社、一九九一年)。
- (92) 註(71)前掲。
- (93) 同交名帳の評価については、註(12) 女鹿一九九七年前掲参照。
- (94) 盛岡藩家老席日誌『雑書』、並びに弘前藩の公記録である『弘前藩庁日記』『津軽一統志』他に拠った。
- (95) 弘前藩は、寛文九年(一六六九)のシヤクシヤインを指導者とする蝦夷地アイヌの蜂起に際して、出兵にあたって津軽アイヌを動員した他、翌年には、東西蝦夷地沿岸に津軽アイヌを通事とする密偵を派遣しており、当時の津軽アイヌがアイヌ語を理解できたことは明らかである〔『津軽一統志』巻第十の上、並びに『弘前藩庁日記』〕。
- (96) 註(90)に同じ。
- (97) 井上統一「民族」『文化人類学辞典』(弘文堂、一九八七年)に拠った。
- (98) 註(10) 榎森前掲。
- (99) 工藤雅樹「古代蝦夷とその社会」『北からの日本史』(三省堂、一九八八年)。
- (100) 渡辺仁「アイヌ文化の成立 民族・歴史・考古諸学の合流点」『考古学雑誌』第五八巻第三号(一九七二年)。
- (101) 宇田川洋「VI アイヌ文化としての送り場」『イオマンテの考古学』(東京大学出版会、一九八九年)。
- (102) 註(12) 女鹿一九九七年前掲。
(めが・じゅんや 岩手県立博物館主任専門学芸員)